

# ヴィクトリアン・タイル

竹多 格 ITARU TAKEDA  
 (INAXライブミュージアム 主任学芸員)



ヴィクトリアン時代のインテリア小物と復刻タイルを使って再現したパブ（「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより）



床や壁のタイル仕上げも含めて再現した、19世紀末から普及し始めた水洗トイレ（「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより）

【\*】多数の産業遺産と周辺の6つの博物館を総合した屋外博物館。世界最古の鉄の橋「アイアンブリッジ」が架かる周辺一帯は産業革命発祥の地とされ、アイアンブリッジ峡谷は世界遺産に登録されている

「世界のタイル博物館」では、5番目の展示室にイギリスのパブを再現しています。腰壁のタイルは、およそ100年前のヴィクトリアン・タイルの復刻品です。イギリス中西部のシュロップシャー州のアイアンブリッジ峡谷博物館【\*】にあるクレイブン・ダンニル社の工房でつくられました。ガラスの塊のように見えるその緑色で透明感のある釉薬は、最先端を極めたタイル製造技術の特徴をよく伝えてしています。無地物は別として、オリジナル品の多色レリーフタイルは筆で色釉を一つひとつのせていくため、手間がかかりました。復刻品もその特色がよく現れています。

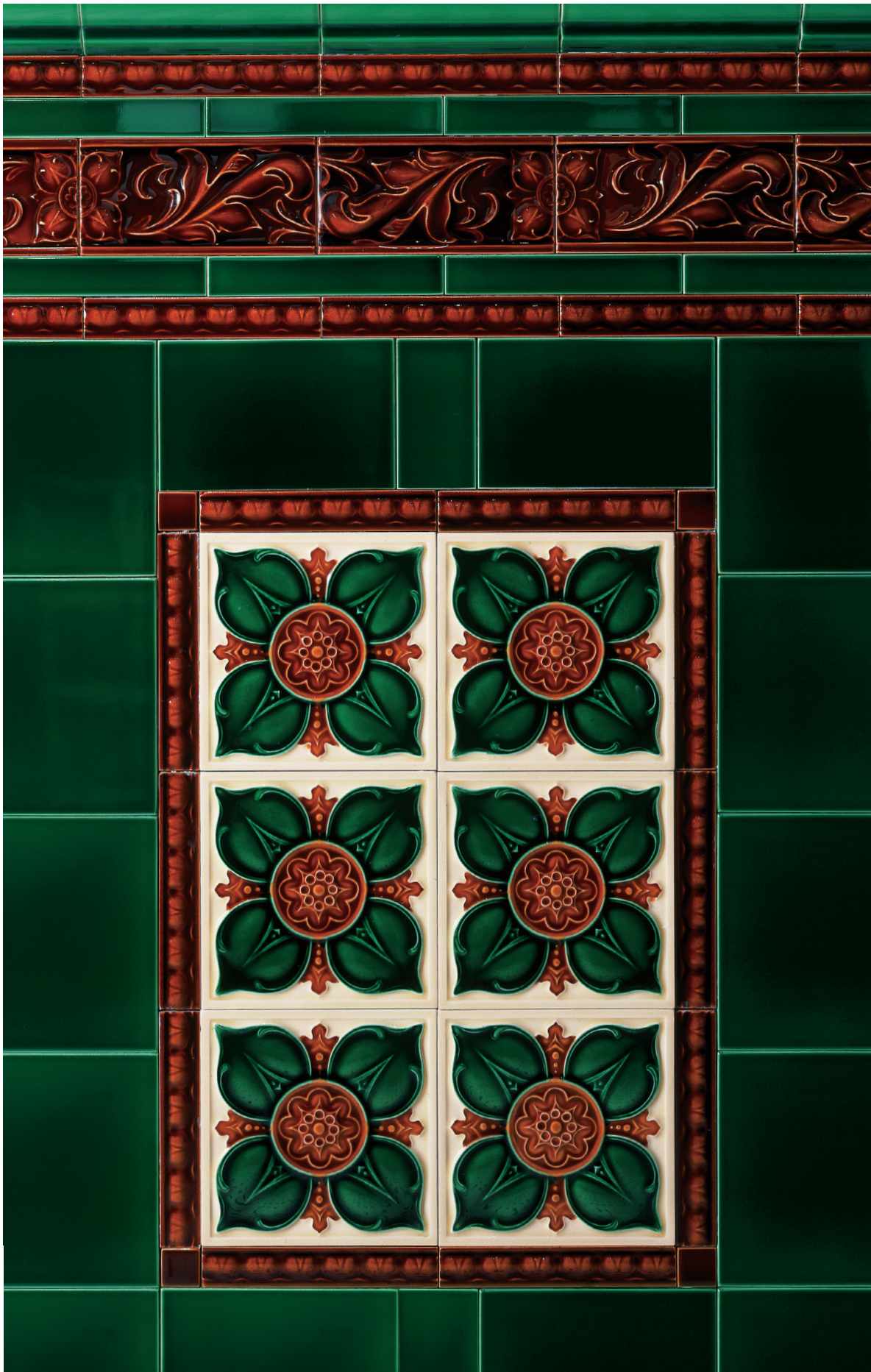
イギリスでは19世紀後半に、資本主義の成長によって台頭してきた中産階級が、住まいに豊かさとするらのライフスタイルを求めるようになりました。住まいは生産の大規模化により、かつての工房での職住一体型から職住分離型に変わり、人々はそれまでの狭くて暗い住まいから、郊外に一軒家や集合住宅を建てて住むようになりました。赤レンガや木材など多様な建材の中でも、特に身近なものとして個人の嗜好に合ったタイルが好まれました。その結果、タイルメーカーも1870年に設立件数のピークを迎え、最盛期には100社が稼働し、さまざまな種類の装飾タイルの量産体制が確立しました。そのほとんどがスタフォードシャー州にあり、なかでもストーク・オン・トレントは、18世紀には燃料の石炭とやきものに適した陶土が採れたことから、陶業地としての条件が整い、多くのメーカーが集中していました。中世の象嵌タイルをゴシック・リバイバルとして機械生産し始めた大手のミントン社も創業しました。

さらに産業の発展に伴う都市への人口集中から、1900年を大きなピークに住宅建設が進みました。この建築ブームの中で、玄関や階段室、リビングの暖炉周り、浴室などに当時の最先端の建材であるタイルが使われました。タイル張りの仕上げはまだ一般には普及しておらず、施工業者が図面にはないタイルを自由に張り付けて仕上げたともわれています。しかし、そのことでタイルの普及に弾みがついたと思われる。

かつての職住一体のロンドン市中での生活は薄暗く、衛生状態も悪く、不健康でさえありましたが、タイルはそのような不具合を一掃してくれました。清掃がしやすく衛生的であり、さらに自然の深い緑色にあふれた装飾が健康的なイメージを与えて多くの人々に愛されました。図柄は当時流行していた植物文様をモチーフにしたアール・ヌーボー調のものが好まれ、タイルメーカーはこぞってそれらを制作し、提供したのです。そのためタイルは急速に普及し、多くの公共施設と住宅に使われました。タイルによる建物装飾は、室内の壁だけでなく床や天井にまで広がっていき、「膨張する装飾」と称されるほどでした。ロンドンにある老舗デパート・ハロッズのフードホールには、装飾を凝らしたヴィクトリアン・タイルが床から天井までびっしりと張られ、現在もなお、その輝きを放っています。★

ただか・いたる——INAXライブミュージアム 主任学芸員／1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶（現・INAX）入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

「世界のタイル博物館」はINAXライブミュージアム（愛知県常滑市）内にあります。詳細は、INAXライブミュージアムホームページ（<http://www.inax.co.jp/ilm/>）をご覧ください。



花模様のレリーフタイルを中心に、数種類のタイルを組み合わせた贅沢な腰壁のタイル張り。基本的に目地はない（「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより）